神様と師匠

龍の花嫁　8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18459181

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻, 女装(白無垢), 年齢操作, モ腐サイコ小説50users入り

相談所vs神様８話目、完結です。
最後まで言葉足らずな2人でした。

Table of Contents

龍の花嫁　8

今日が、タイムリミット。

「俺がいなくなった場合のことなんだけど」
痛い腰をさすりながら、これだけは伝えなければ、と霊幻が相談所で芹沢に話しかける。
「この紙にまとめておいたから、読んで分からないことがあれば」
「今忙しいんで黙っててもらえますか？」
え、ひどくない？と霊幻が固まる。
「それに、聞くつもりはないです。あなたは逝かせない」
目の下に隈を作った芹沢は霊幻に目すら配らず、ずっとスマートフォンをいじっている。
たぷたぷたぷ。
……しばらくすると、どこかへ電話。
それが終わるとまたどこかへメッセージを飛ばしていた。
仕事中に堂々とスマホをいじる芹沢を霊幻が嗜めようとしたのを、エクボに邪魔される。
「おっ、霊幻。シゲオとたっぷり子作りしたみたいだな？腹からシゲオの力が漏れてるぜ。それならしばらく神気の影響を防いでくれるだろ」
「ぶっ！？こ、子作りって……」
「大事な言霊だ、受け取っとけ。古来神々には子作りはかなり重要な要素になってるんでな」
「……それにしても、モブのだって分かるんだな、これ」
さす、と霊幻は思わず腹をさする。
「能力者が見ればな。色というか質感というか温度というか、それがモブと同じなんだよ」
「……今、能力者と会いたくねぇなぁ……」
いてて、と腰もさすりつつ。
そうして夜がふける。

※※※※※※

いつものように白無垢を着て。
やしろに向かおうとする霊幻に、真っ青な顔をした老婆が声をかけた。
「霊幻先生、これを──」
おずおずと老婆は両手でおしいだいて小さな懐剣を差し出した。
「花嫁道具でございます。お役に立てるか分かりませんが、荒潮川の底で１００年かけて削られた水晶でできた刀です」
「……ドラゴンスレイヤー、竜殺しのヤイバですか」
「竜退治にはつきものですが……はたして神様に通用するモノなのかどうか……」
「……ありがたく、いただいていきます」

※

霊幻が日本家屋を出ると。
そこには、能力者が勢揃いしていた。
「非常事態だと聞いて駆けつけました。えと……」
口火を切ったのは花沢輝気だ。まず霊幻の格好に戸惑い、次に下腹部にひたりと視線を合わせて戸惑う。
「……今日は霊幻さんと影山くんの結婚式ですか？」
「まあだいたいそんなもんだよ」
「違う！」
何故か肯定したモブに霊幻は大声で叫ぶ羽目になった。
「……ソレはどういうことか後でじっくり説明していただきますよ」
影山律に下腹部を指差されて黒いオーラで脅される。バレなきゃいいって言ってたのは空耳だったんですかね！？と霊幻は半泣きになった。
「というかなんでこんなに超能力者勢揃いなんだよ！何がおこってんの！？」

会いたくない、という日に限って。
「俺と影山くんが昨日から連絡して集まってもらいました。霊幻さんの命がかかってることと、神様と戦うことになるかもしれないことを伝えて」
「……みんな──」
面々を眺めて霊幻がありがたさにウルっときた瞬間。
「それにしても神様に嫁ぐってのに腹に律の兄貴の精気しこんでいくとか、めちゃくちゃドロドロしてんじゃん！」
鈴木将に言われて涙が引っ込んだ。
「そういや２人って付き合ってるのか？それとも今回のための緊急措置か？ソレ」
桜威が素朴な疑問を呈する。
「ノーコメ「付き合ってます。結婚を前提としたお付きあいです」モブくーん！？！？！？！？」
茂夫は埋められる外堀は埋めにかかっていた。霊幻の焦りなどどこ吹く風である。
そして、能力者の中で数人ショックを受けた者がいたのを見逃さず、脳内にメモった。霊幻は案外モテるのである。主に能力者に。
「霊幻おまえ本当ヤバいのばっかり引き当てるな……今日は離縁になるはずなんだろ？俺まで要るか？」
森羅万象丸が言うヤバいのがもはやモブのことなのか神様のことなのか判然としない。
「念には念を、です。霊幻さんはそもそもの生け贄の条件である性別すら無視して神様に気に入られちゃってるんで……」
「芹沢の言う通りなんだよなぁ。BSSだけじゃなくNTR（※ねとられ、寝盗られ）ヘキまで神様が開眼しないっつー保証はないんだよ」
エクボの言ったことにほとんどの子供達がきょとんとし、男性と女性の一部が顔をしかめた。
「まあとにかく……アタシたちも手を貸すよ」
槌屋がチラチラと霊幻の腹を見ながら言う。
皆それぞれに励ましの言葉をかけてくれたが、皆一様に下腹部を気にするので、霊幻は今すぐにでも逃げ出したくなった。

「花嫁様はやしろに入る時間にございます」
老婆の声が響き、能力者達は一旦霊幻から離れる。
しずしずと介添人に連れられる霊幻を見て、誰かが「綺麗」とこぼした。
つられて茂夫も改めて霊幻を見る。
白無垢から覗く白い手が、華奢に美しく見える。同じく白いうなじは目に眩しく、そのまま胸元を見たくなるのが、白無垢に阻まれてしまう。控えめに差した目元と口元の紅が、霊幻の白さを更に際立たせていて。
──艶やかで神聖な、花嫁だった。
「あの人は僕のだ」
あの花嫁をこの手で昨日抱いたのだ、という感慨と、何故あの人が別の男に嫁がさせられているのだという怒りを混ぜて、茂夫の口からこぼれ落ちた言葉。
「きばれよ」
エクボはそんな友人の様子に、そっとエールを送った。

※

やしろの中心にひかれた布団に横たわる白無垢姿の霊幻。
その周りをグルリと結界のように円形に取り囲む能力者達。
やしろに入ってからは、みな険しい顔になっていた。
「……ヤベぇんじゃねぇの、コレ……」
『儀式』が完成に近づき、おそろしいほどの神気が満ちた場で、一際強い神気を放つ霊幻に、鈴木将は思わず目をかばう。
「ヤベぇんだよ、見ての通りな。……とにかくまず、『離縁』に賭けるぞ。５分待つんだ」
エクボの言葉に頷く面々。すでに霊幻が眠りに落ちて、１分は経っていた。

※

いつもの日本家屋じゃない。

少し前に龍神が「新居」だと紹介した水車小屋の前にひかれた緋毛氈に俺は座していた。
目の前には同じく緋毛氈に座した大人のモブがいる。いや、違う。龍神、荒潮川だ。
俺たちの前には、大きな赤い盃が一つ。並々と不思議な光沢を放つ酒で満たされている。誓いの盃だ。
ああ、とうとう。ここまできたのか。
「……やってくれたね。わざわざ穢れてくるとは。男だからその手は取れないと思ってたよ」
「衆道を知らないのか、そこまで珍しい話じゃねぇだろ」
「そうか、そうだったね、この姿も男性のものだ。うっかりしていたね、いつもと変わらなかったから、油断していたよ」
白い着物の袂で龍神は口元を隠して笑う。
「……つらい恋をしているね、新隆」
どき、と狼狽えてしまった。モブの姿でそんなことを言わないで欲しい。
「その腹の精気だって、女であればきっと子を成しただろう濃さだ。でも新隆にはそれができない。つらいねぇ」
「うるせぇよ、ヒトの幸せを勝手に決めるんじゃねぇ」
「それでも辛い幸せだ」
俺は黙ってしまう。龍神は俺の気持ちを喰って、知っている。唯一の理解者だ。その『共感』が、少しばかり心地良かった。
「昔から君のようなモノは居たよ。狐と呼ばれた女性の話なんか有名かな。貴族の女が落ちて、狐と蔑称された。が、貴族の男と恋に落ちる。狐は悩むが、男の将来を考えて、身を引く。何もかも、与えてから」
「……そういうんじゃねぇよ」
「いいや。君の恋人にとって君は【狐】なんだろう？君が教えてくれたんじゃないか。余りに年上で、尊敬できるような人間でもなくて、しかも男だ。情に流されきっぱり振ることもできない、モブに振られるのを待ってる中途半端な化け狐」
「ケンカ売ってんのか」
「ふふ。浮気してきた罰だよ、正気のまま神の言葉を浴びるがい

い」
うげ、と俺が顔を歪めるのを見て、楽しそうに龍神が目を細めた。
「うそだよ。……おめでとう、新隆。儀式は失敗だ。生け贄は乙女でないといけないから」
かく、と身体の力が抜ける。やった。やりとげた。
「でもね。だからこそ……君自身に訊いてみたかったんだ。今日は、まどわさないよ」
じっ、とまっすぐ、光らない目で、龍神は俺をみつめる。
「私と結婚してくれませんか、霊幻新隆」
そしてすっと手を差し伸べてきた。
……大人のモブの姿でやるのやめて欲しい。破壊力が、すごい……。
「私は貴方が気に入ってしまった。贄の条件なぞ、どうでもよい。もっと貴方と話していたい。貴方が成仏するまでの３００年間、きっと幸せにするから」
「あ〜、わりぃが……」
「それか、貴方を神の末席に加えてもいい。貴方が永劫の時を、私と生きたいと願ってくれさえすれば、貴方は永遠の命を得られるよ。それに私も、寂しくなくなる。３００年ごとにいなくなる花嫁に、涙せずともよくなる。……こんなことははじめてだ。みんないつも、恋する人の姿に夢現のまま嫁いでくるからね」
そうか。３００年ごとにこいつの嫁さんは成仏して、元の恋人のところに帰ってたのか……。しかもこいつは３００年間、恋人のふりをし続けてたのか？そいつは、
「キツいな」
「でしょう？いい加減私も、伴侶が欲しかったのです。あなたはとても面白い。私の術を何度も破り、指輪にヒビまで入れた。それに、上有家のものから物騒なものまで受け取ってきて」
……ポーカーフェイスを貫けたよな？俺。
「くれぐれも取り扱いには気をつけなさい。そのつるぎは、人の魂はおろか神の魂まで傷付ける。それを私に向けたら……許してあげられないよ」
にっこりと俺は笑った。

やれやれ、と神は笑った。
「それで？返事はどうだい、新隆」
「丁重にお断りする」
「そうかい？残念だなぁ。私なら君の願いを叶えてあげられるのに」
「願い、だと？」
「足手まといになりたくないんだろう？あの少年の」
ひゅ、と。息を呑んでしまった。ミスった。
「その素晴らしい少年の、未来を潰したくない。輝かしい人生を、台無しにしたくない。……できるよ、私なら」
「どうやって」
あ、いけない、呑まれている、
「君を忘れるようにしてあげる。君が私に嫁いだあと、その少年には特別にお祝い返しを贈ろう。君を早く忘れられるように。若い日の思い出になるように」
「できる、のか、そんなこと」
ああ、ダメだ、その手を取っては、
「できるさ。私を何だと思っているんだい？」
「……神様」
願いを叶えてくれ。

※※※※※

「！影山くん、霊幻さんの様子が──！」
芹沢の握っていた手が冷たくなり、白い顔が青白いまでになっていく。
「ちぃっ、失敗したか！おい準備はいいか能力者ども！」
ぐるりと霊幻の周りに円になった能力者達は、エクボの呼びかけにそれぞれ口々に応をあげた。
「神域に押し入って神様をビビらせ、その隙に霊幻を連れ戻す！何から何まで力技だ、覚悟しろよお前ら！呪を込めて力を回せ！」
切羽詰まったエクボの声に頷いた茂夫は、ぶわりと身体から力を溢れさせ、隣の律に手渡す。

「戻ってこい」
律はその力に自分の力を乗せて増幅し、左隣の鈴木将に。
「戻ってこい」
将は桜威に。
「戻ってこい」
桜威は誇山に。誇山は邑機に。邑機は嶽内に。嶽内は柴田に。柴田は槌屋に。槌屋は無飼に。無飼は森羅万象丸に。森羅は竹中に。竹中は星野に。星野は朝日に。朝日は黒崎に。黒崎は峯岸に。峯岸は羽鳥に。羽鳥は蘆舅に。蘆舅は輝気に。輝気は芹沢に。
「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」
「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」
「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」
「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」「戻ってこい」
そして、芹沢は茂夫の背中に手を当てて力を渡す。
受け取った膨大な力を右手に濃縮し、茂夫は霊幻の胸に手を当てる。
「戻ってこい、霊幻新隆──！」
カッ、とやしろの中に閃光が弾けて。
影山茂夫は霊幻に手をついたまま、ガクンと意識を失った。
「せ、成功したのかい？」
輝気がエクボを伺う。
「たぶんな。神域への侵入には成功したはずだ。あとは適宜シゲオに力を送ってやってくれ。呪を籠めるのを忘れずにな」
芹沢は心配そうに霊幻の顔を覗き込み、律は心配そうに茂夫の顔を覗き込んだ。

※

吹きつける真っ白な霧の中。
茂夫はとにかく前に進んでいた。
神域とやらで歓迎されていない彼は、さっきから同じ風景を延々と歩かされている。
「霊幻新隆、霊幻新隆」

ともすれば正気を持っていかれそうな世界で、唯一の道標をなんども口ずさむ。
そう。それさえ連れて帰れればいい。
ざぶ、と足下に透明な濁流が流れているのに茂夫は気が付いた。
清流は勢いを増し、茂夫を押し流そうとかさまで増してくる。
「本当は力を温存しておきたかったけど……」
清流に押し流されそうになり、茂夫は身体を超能力で浮かせた。
そしてそのまま前に進む。
「霊幻新隆、霊幻新隆」
目標を呪（まじな）いながら。
ごうっ。
次は突風に煽られて濁流に飲み込まれそうになる。
茂夫は仕方なくバリアを張った。
妨害されている。そうひしひしと感じながら。
霧と濁流に阻まれながら、前へ前へ飛び続けて。
茂夫はようやく光を見た。
その暖かい光はゆったりと霊幻の形をとって。
「師匠！」
──もはや手遅れであることを、茂夫に伝えた。
穏やかな森の中の川辺で、水車小屋がガコガコと音を立てている。
その川を、龍神に手を引かれて、霊幻は渡り切ってしまった所だった。
──彼岸に、渡ってしまった。
「モブ！？どうして──」
うろたえる霊幻の腰を、ぐいっと龍神が抱き寄せる。
茂夫がピリっと髪を揺らめかせた。
「迎えに来ました、師匠。みんなあなたの帰りを待っています」
「『そんなの今だけだ』」
「あなたが居なくなったら、みんな悲しみます」
「『どうせすぐ忘れる』」
「──っ、何なんだアンタ、さっきから──！」
霊幻の言葉を代弁するように言う龍神に、茂夫は怒鳴りつける。
「今の私は霊幻の中に宿っている。彼の気持ちならいたいほど分か

るんだよ。もちろん、君の顔を見て、それが揺らいでいることもね」
黙り込んで俯いてしまった霊幻の肩がびくりと震えた。
「……モブ」
意を決して、ゆるゆると霊幻は顔を上げる。
「俺は、俺の意志で龍神について行くことに決めたんだ。だからもう、帰って欲しい」
「え──」
「龍神が言ったんだ。神の力で、モブが俺を忘れるように、思い出になるようにできる、って。俺が死んだ後、モブは本当の意味で幸せになれるんだよ」
「師匠……」
「な、分かるだろ、モブ。愛してるよ。心から愛してる。だからこそ、俺たちは別れた方がいいんだ。いい機会だろ？これはまさしく、神様が与えてくれたチャンスってやつだ」
「師匠──」
ふぅ、と茂夫はため息をついて。
「何を言ってるのかさっぱり分かりません」
淡々と吐き捨てた。
「はぁ！？お前、今俺は結構大事なことを──」
「それはあくまで師匠の立場からですよね？今は師匠の立場を思いやる必要が無さそうなので、いいかなと」
「良くはねーだろ！！」
「じゃあ僕の立場も思いやってくださいよ。今の僕は、神様に祟られるかもしれないのに、命の危険をおかして、色んな人を巻き込んでここに来てる。全部師匠を失いたくないからだ」
「そ、れは」
「わかってますか？師匠。神様について行ったら、本当に２度と会えなくなる。エクボみたいに幽霊としてさえも会えなくなるんです。……僕はもし師匠が死んでも、問題なく捕まえておくつもりだったのに」
ひたりと茂夫なりの愛情で満ちた瞳に見据えられ、霊幻はひくりと喉をひきつれさせた。

「ねぇ師匠。どうでもいい違いなんですよ、性別とか、年齢とか、立場とか、生きてるとか、死んでるとか。僕から見れば大して変わらない。それを全部ひっくるめて、僕は師匠にお付き合いを申し込んだんです。……どういう意味か、師匠ならわかるはずだ」
顔を上げた霊幻は。
泣いていた。
ずっと感じていた不安を、茂夫が否定してくれたから。
「モブ、俺は──」
じゃぶ。川を渡ろうとした霊幻を、龍神が抱き止めた。
「おっと。ダメだよ霊幻。もう君は川を渡ってしまったんだ」
霊幻に頬擦りする龍神に、ぷち、と茂夫の何かが切れる。
「分かりました、師匠。そいつを溶かせばいいんですね？」
「いやちょっ、穏便にだな！？」
「いやぁどちらにしろ、こうなっていたと思うよ、霊幻。この霊能力者は思い上がっている」
ズズズ、と地響きが鳴り、川が水でできた竜に変わっていく。
天に届くような巨大な竜は、霊幻と龍神を守るようにトグロを巻いた。
「──！やめれくれよ、龍神、たのむ、モブを傷付けないでくれ」
霊幻が人型の龍神にすがるが、龍神は霊幻の頭を撫でて微笑みを返すばかり。
「そっちがその気なら──！」
茂夫が手をかざして。
【神】に害なそうとしたのを霊幻は察して。
胸元の懐剣を取り出し、鞘を抜いた。
「ダメだ、モブ、それだけはダメなんだ」
龍神が目を細める。だが、はっと青くなり手を伸ばした。
「お前にそんなことをさせるぐらいなら──」
霊幻は目を瞑って懐剣を掲げ、
「師匠ダメだ！！」

自害のために、懐剣を自らの胸に振り下ろした。
パキン、と石の指輪が割れた音がした。

「……っ？」
いつまでも衝撃が来ないので、おそるおそる霊幻は目を開ける。

霊幻はいつのまにか龍神に抱き締められていて。

その龍神の背に、懐剣が深々と刺さっていた。

「龍神！？」
「……無茶を、するね、私の、花嫁は、」
ごぼりと龍神の口から清水が吐き出される。
ドロドロと水龍も水に還ろうとしていた。
「悪意の無い、ヤイバだから、思いの外、深く刺さってしまっ、た。まったく、君は……、分かってる、のかい？私が、庇わなければ、君の魂は、消滅して、しまったのだよ？」
「しゃべるな！くそっ、神様の手当てなんて、どうしたら……」
「……心配して、くれるのかい。ふふ、大丈夫、これしきのこと、少し休めば、大丈夫だから──」
とん、と龍神は霊幻の背中を押す。
「お行き、霊幻。それほどまでに、愛した者のところへ。今回は、破談に、してあげる」
ざぶ。ざぶ。霊幻の足が川を渡っていく。
「荒潮川──！」
「『振り返るな』、『霊幻新隆』！」
振り返ろうとした霊幻はビタリとその動きを止める。
そして意を決して、岸で待つモブの元に向かう。
「師匠、ほんとに、アンタって人は──」
涙ぐむモブに霊幻は苦笑を返す。
「待たせたな」
そうしてモブの手を取って。

ばちり、と２人は目を覚ました。

※※※※※

目を覚ましたら、阿鼻叫喚だった。
口々に能力者達が良かったというのはいいのだが、神と闘った負荷で軒並み全員鼻血を流しているし、嘔吐を堪えているものもチラホラいる。
とにかくやしろから出よう、と全員どやどやとやしろから出る。
「良くぞご無事で……！」
老婆が駆け寄ってくる。
「ああ。結局コレに助けられました」
胸元から懐剣を出そうとして、いつの間にか鞘から抜けていたつるぎがボロボロに砕けているのに霊幻は血の気が引く。
「すみません！預かり物を──！」
「いえいえ、良いのです。そのつるぎが役目を果たしたあかしですから」
ほっとしたように老婆が懐剣のかけらを受け取った。
「とにかく今回は破談だそうです。やれやれですね」
「そうですか。ともかく良かったです」
着替えのために霊幻は日本家屋に入っていく。
その上をいぶかしそうに、エクボがふよふよ浮いていた。
「『離縁』じゃなくて、『破談』だと……？」

※※※※※

「あれ？ここは……」
「夢におじゃまするよ、新隆。こころに私を住まわせてくれてありがとう」
「やっぱりお前か。荒じ──」
そっ、と指で唇を押さえられる。
「神の真名をみだりに呼ぶものじゃないよ」
「……分かったよ、龍神」
いつもの日本家屋で。俺と龍神は座して向かいあっていた。
ただし俺はいつもの白無垢ではなく、部屋着のスウェットを着ている。

……部屋から浮くから勘弁してほしいな……。
「今日は伝えたいことがあってね。それで少しお邪魔したよ」
「おお、どした？」
「……君は本当に私を畏れないね。少しは怖いと思わないのかい？君を殺しかけたのに」
「ちゃーんと神様としては畏れてるって。……だってよ、あんた悪い事してないじゃん、一個も」
しん……と静寂が場を支配する。
「生け贄だってホントにあんたが催促したのかどうか怪しいものだし、今回の儀式だって、上有の婆さんが強引に進めたからアンタはそれに乗っただけだろ？しかも条件ガン無視なのに、あえてこらえて儀式を続けた。上有の一族に災いが降りかからないように」
「……すごいね、気づいていたのかい」
ふ、と龍神が微笑む。
まあな、と返した。
「そんなだから私は君を気に入ってしまったのだよ、分かってるかい？」
「それはそっちの勝手だろーが」
「君がすこしだけど、想い人だけじゃなく私のことも気の毒に思ってくれているのが、感情を食べて分かった。……だから私はそれが惜しくなってしまったんだ」
俺は黙って龍神を見る。
「……ずいぶん意地悪をしてしまったね、ごめんね」
「あ、そうそう」
ばっと立ち上がって龍神に膝蹴り。
「散々セクハラしたのだけはお前が悪い。今のでチャラな」
神様でも正当な報復で突然蹴りつける、俺の必殺技である。
「がはっ！……君ねぇ……いやでも……まぁいいや。ね、霊幻。もしあの子と別れることがあったら、来たくなったら、いつでもこちらへおいでよ。待ってるから。……今日はそれを伝えに来たんだ」
「悪いけど、それは無いと思うぜ、神様」
苦笑する俺を龍神はきょとんと見ている。
「俺は俺を信じることにしたんだ、神様。あれだけの人が命懸けで

助けに来てくれた、モブが文字通り必死で取り返しに来てくれた、俺を」
「それはいいことだね。新隆の自己評価の低さは私もどうかと思っていたから、賛成だよ」
「俺を信じるってことは、俺がずっとモブを好きでいることを信じてる、モブを信じるってことでもある」
「……」
「もう、信じない楽さには逃げない。モブの人生にも、俺の人生にも、真剣に向き合うことにした。だからごめんな。俺はお前の伴侶にはなれない」
「……残念だよ、新隆。でも忘れないで。逃げ道もあるってことを。あれだけの能力者に囲われたら、逃げられないって思うこともあるかもしれない。でも、ここに」
す、と龍神が彼岸花を差し出す。
「逃げ道は、あるからね」
そうして神様の姿は霧のように消えていく。
「……ありがとよ」
ふ、と笑って俺は呟いた。

※※※数年後、茂夫２０才※※※

僕は焦っていた。
とうとう来た。僕は２０才になってしまった。これまでに色んなことがあったし、大学生活を謳歌しているが、絶賛師匠とラブラブでもある。つまり、別れるつもりなんか毛頭無い。
にも関わらず。最近師匠の様子がおかしい。忙しく何か動いている。
これはもしや。
僕がハタチになったから、別れようとしているのでは……？
もしくは、失踪……？
させない、させないよ、師匠……！
「おう、いらっしゃい、モブ」
アパートの呼び鈴を押すと、薄着の師匠に出迎えられる。露出して

る肩とか、膝とか、色気がヤバい。年々色っぽくなっていくのが、嬉しくもあり怖くもある。変な虫とか神とか付きませんように。芹沢さんも早くもっと待遇のいい職に就けばいいのに、いつまでも相談所辞めないし……エクボがいるから大丈夫ですよ、って言ってるのに。いい加減師匠のことは諦めてくれないかな……。いや、あの人は諦めてるのに側にいるんだったな。本当に、タチの悪いライバルだ。まだハッキリしてるだけマシだけど。
「あのな、モブ。話があるんだけど……」
ほ　ら　き　た。
嫌ですからね。別れませんからね。別れ話なんかさせません。
「それより、師匠……」
「あっ、ちょっ、オイっ」
壁に押しつけて、唇を塞いで、膝でぐりっと師匠の股間をこねり上げる。
ビクンと跳ねた身体が、熱っぽい息を漏らしたのを逃さない。
師匠の甘い舌をこねて、吸い上げる。チョコレートの味がする。これから晩御飯なのに、つまみ食いしましたね？
「も、ぶ。するなら、ベッドで……」
……師匠、そんなに快感に弱くて大丈夫ですか？あと、準備してたんですね？やらしぃなぁ、もう。

たまらない。

ベッドまで連れて行くと、期待に師匠は笑う。その顔が妙に色っぽくて、僕はがっつくように師匠の短パンと下着を剥ぎ取る。
「ふふ、モブ、いいよ。──好きにしてくれ」
ぶち、と理性が本能と切り離された音がした。
師匠の控えめな淡い乳首にしゃぶりつき、こねて、つまんで、甘噛む。
「ぁあっ、モブ、気持ちいいよ、それ、すき、」
空いた手で後ろの窄まりに慣らしにかかる。
……余裕で２本入る。万端じゃないですか、師匠。
「……モブ、メスイキ、いやだから……もう、挿れて？」

そのお願いはきけません。何故ならイキぐせがついた師匠はエロ可愛いので。
指を３本に増やした僕は、慣れた手つきで師匠の前立腺をぐっ、ぐっ、と刺激する。
「あ、〰〰〰っ、ゃ、だって、ばぁ……っ！」
前を兆さないまま、師匠は背を弓なりにそらして身をよじる。ぽろ、と自然に溢れた涙をすすった。甘い気がするから不思議だった。
「……挿れますね」
「……中出し嫌だからな」
「僕は出したいです。明日も相談所には芹沢さんやテルくんが来るんでしょう？師匠が誰のものか記しておきたい」
「……一回だけな」
「善処します」
「このやろ」
軽口を叩きながらゆっくり挿入していく。この、なじむ、感じがいい。ほっとする。
「あっ、いく」
イキグセのついた師匠のあごがくんっと反って、ぎゅうっと足が抱きついてくる。
「……っ、」
僕は出さないようにうねり締め付けに耐える。
「……動きますよ」
「ぅん……」
上がる息。はー、はー、とどちらのものか分からない荒息が混じり合う。気持ちいい。出して、入れてに集中する。
「あっ、ぁあ、んっ、んぅっ、ァっ、ァうっ、もぶ、もう、」
師匠の手が背中をくすぐるのに、ぞわっと快感がいや増す。
「……っ、も、イキますね、」
「ぅん、俺も、」
ぐりぐりっと前立腺をこすってその奥に欲をすりつける。
「〰〰〰っあぁあ……っ！」
トロ、と師匠の性器が精をこぼして。

「……っ」
同時に僕も果てた。
「はぁ、はっ、はぁ……」
まだ息が整わず赤くなった胸を上下させる師匠に。
「では、もう一回お願いします」
ゆるゆると腰を動かしながら言うと、約束が違う、と逃げられそうになったので。
キスで誤魔化してなだれ込んだ。

※

すうすうと眠る師匠を見ながら、この殺風景なアパートを忌々しく睨みつける。
僕はこのアパートが嫌いだ。いつでも引越してしまえるような、物の少ないこのアパートが。
気を付けないと。

いつでも師匠は、消えてしまえる。

※※※※※

アパートの窓を開ける。
「ふぅ……」
引越し作業もひと段落だ。あとは業者が来るのを待つだけ。
このアパートも長く住んだなぁ、なんて段ボールに囲まれて感慨にふけっていると、がちゃんと勝手にドアが開いて不機嫌MAXのモブが入ってきて、飛び上がりそうになった。
「やっぱり、消えるつもりだったんですね……」
「はぁ！？……っ、いててて！モブ、痛いって！」
ぎりぎり、と音がしそうなほどモブは腕を掴んでくる。
「そう師匠が強硬策にでるなら、僕にも考えがあります。師匠が逃げられない場所に閉じ込めてしまおう」
「もぶ、ちょっと、はなしを、」

「探検隊も来れないような断崖絶壁がいいかな。大丈夫、死なないようにちゃんと僕が『飼って』あげますよ。死ぬまでお世話します」
「〜っ、話しを、きけ！」
俺は噛み付くようなキスを仕掛ける。
しばらくキスを堪能して、はっとモブはごまかされまいと俺を引き剥がした。
「その手には──」
「俺はお前の実家に越すんだが、ご両親から何も聞いてないのか？」
「……へ？」
「まったく、お前は何度話そうとしてもまったく聞いてくれないし……ご両親から近々話す、とおっしゃってたが、さては行き違いにでもなったな？」
やれやれ、とため息をついて、ぽすんとモブの胸におさまってから口を開く。
「お前の家に籍を入れてから、俺は結構影山家に顔を出してたんだぜ？そしたら、律もお前も2人とも家を出て寂しいし、男手も欲しいし、部屋も空いてる事だし、もう息子なんだから、同居しないか、ってご提案いただいてな。俺もアパート代が浮くし、それならってお前んちにやっかいになることにしたんだよ」
「そ、んなこと、相談も無しに……！」
「いや、引越しの期日があるのに相談させずにいつもセックスになだれこんでたのはお前だからな」
「それに、なんで両親と同居なんですか！？それなら僕と同棲しましょうよ！」
「お前のマンションから相談所に通えるわけねーだろが」
ふるふるとモブが色んな感情で震える。言いたいことが渦巻いて言葉にならないらしい。
「ま、『影山新隆』は文字通り、お前の家に嫁いだ、ってことだよ」
にや、とモブの腕の中で俺は笑って。
ぼん、とモブの喜色は爆発したのだった。

∽Happy End∽